

〔原著〕

中学生の社会的スキル獲得動機の検討

—学校適応状態の差異に注目して—

筑波大学人間総合科学研究科：大島 由之

筑波大学心理学系：新井邦二郎

Exploring the motive for social skills acquiring in junior high school students
: From perspectives on differences among conditions of adaptation in school

Yoshiyuki Ohshima and Kunijiro Arai

問題と目的

文部科学省の学校基本調査(2004)によると、中学生の長期欠席者148,547人のうち不登校生徒数は112,211人と、全体の約7割強を占めており、不登校が現在も大きな問題であることを示している。また文部科学省(2003)は、中学生が不登校状態となった直接のきっかけの中で最も多い要因は「友人関係をめぐる問題」で、全体の22%を占めていることを示した。これは中学生の学校生活において、いかに友人との関係がその学校生活の適応にとって重要な要因の1つであるかを示しているものであると思われる。

心理学における対人関係の問題へのアプローチの1つに、社会的スキルからのアプローチがある。社会的スキルとは、「言語とノンバーバル・コミュニケーションの両方を含む、満足できる十分な社会的相互作用に必要なスキル」(藤永・仲, 2004)と定義され、社会的スキルが低い者は、ソシオメトリック地位が低いこと(佐藤・佐藤・高山, 1988)、孤独感が高いこと(金山・佐藤・佐藤, 2000)、学校不適応感が高いこと(戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野, 1995)などが指摘されている。これらの関連から対人関係に問題を抱えた児童・生徒に対し、社会的スキルを身につけさせる社会的スキルトレーニング(Social Skill Training; 以下 SST)が行われている。近年では SST を対人関係に問題を抱える児童・生徒に対する援助という立場だけでな

く、学校不適応や問題行動の予防しようとする立場から、援助の対象児のみを SST の対象とするのではなく、1つの学級を対象とした集団 SST が主に学校現場において広く行われるようになっており(金山・佐藤・前田, 2004)、その有効性が示されている(後藤・佐藤・佐藤, 2000; 江村・岡安, 2003; 渡辺・山本, 2003)。

しかしながら集団 SST のような学級集団への介入の課題として、大きな集団を介入対象とするために参加者1人ひとりの介入ニーズを十分に把握できないことが挙げられている(佐藤, 2004)。そこで、この集団 SST を実施する際、対象となる生徒に対してどのような社会的スキルを身につけたいかについて事前にアンケートを行い、生徒のニーズを反映した内容の集団 SST の実施が行われ始めている(例えば小暮・宝田, 2005)。このように集団 SST の対象者の社会的スキルのニーズを調査することは集団 SST を実施する上で有効であると思われる。例えば中台・金山・斉藤・新見(2003)は小、中学校の教師に対し、どのような社会的スキルを生徒に学ばせたいかについて調査した。また同時に社会的スキル教育を受けた後の中学生に対し、今後学ぶ機会があったらどのような社会的スキルを学びたいかについて調査した。その結果、中学校の教諭が必要と考える社会的スキルと生徒のニーズとの間のずれの存在が示された。ここからは事前に生徒のニーズを把握せずに指導者の考えるニーズに基づいて集団 SST を実

施すると対象の動機づけを低下させてしまう可能性が考えられる。このように事前に対象者のニーズを把握することは、集団 SST を実施する際に生徒の動機づけの低下を防止するという点で意義があると思われる。しかしながらその一方で、中台ら（2003）が課題として挙げているように調査対象が集団 SST を受けた特定の中学校 1 校の生徒（金山・中台・前田，2004）であるという点に加え、ニーズ調査の対象となった社会的スキルがそこで行われた集団 SST において取り上げられたスキルの中から複数回答法で測定されている点において課題を残していると思われる。

また学校における集団 SST では学級を 1 つの単位として援助が行われる。この場合、学習したいと考える社会的スキルが、学級に所属する個々の生徒によって様でない可能性が考えられる。河村（1999a）は援助ニーズの水準によって分類した生徒に対し、学校生活の満足度についての面接を行い、学校適応状態によって援助ニーズの水準が異なることを確認した。さらに河村（1999b）は個々の生徒によって援助ニーズの具体的な領域が異なる可能性を示唆し、それに対応した心理教育的援助サービスの実施の必要性を述べている。このように学校適応状態や個々の生徒によって援助ニーズの水準や具体的領域に差異が見られるということは、学校適応状態によって学習したいと考える社会的スキルの内容や、その程度が異なる可能性が考えられる。しかしながらこの点に関する研究は現在のところ行われていない。

そこで本研究では、生徒の社会的スキルを獲得することへの動機を社会的スキル獲得動機として定義したい。これは中台ら（2003）で用いられているニーズ（すなわち欲求）という語句が「生活体に生理的・心理的な欠乏や不足が生じたとき、それを満たすための行動を起こそうとする緊張状態・要求」（松村，1998）と定義されているのに対し、本研究で用いる動機という語句は「人間や動物に行動を引き起こし、その行動に持続性を与える内的原因」（松村，1998）と定義されており、より本研究で用いる構成概

念の性質を端的に表現していると考えられるためである。この社会的スキル獲得動機について、中学生を対象に調査を行い、学校適応状態ごとにその差異を明らかにすることを目的とした。

方 法

調査対象 茨城県内の公立中学校 4 校に通う中学生 596 名（男 312 名，女 284 名）を対象とした。各学年の内訳は、1 年生 278 名（男 147 名，女 131 名），2 年生 318 名（男 165 名，女 153 名）であった。平均年齢は 13.11 歳（SD = .72）であった。

調査時期 2004 年 9 月下旬～11 月上旬に実施した。

手続き 各中学校のクラス担任に調査を依頼し、学活等の時間を用いて質問紙を配布・教示をしてもらい、集団で調査を実施した。

調査内容

(a) 学校適応状態の測定

学校適応状態を測定するために、河村（1999a）による中学生用学校生活満足度尺度 20 項目を用いた。この尺度は生徒が自分の存在や行動を級友や教師から承認されているか否かについての「承認得点」10 項目、生徒の不応感やいじめ・冷やかしの被害の有無に関連する「被害感・不応得点」10 項目の 2 つの下位尺度から構成されており、「あてはまる」から「あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

(b) 社会的スキル獲得動機の測定

社会的スキル獲得動機を測定するために、戸ヶ崎・岡安・坂野（1997）による中学生用社会的スキル尺度 25 項目を、動機を尋ねる形に修正したものを社会的スキル獲得動機尺度として用いた。戸ヶ崎ら（1997）の尺度は、友だちとの関係を形成するために必要な行動についての「関係参加行動」8 項目、築いた人間関係を向上させるために必要な行動についての「関係向上行動」10 項目、人間関係を維持するために必要な行動についての「関係維持行動」7 項目で構成されている。

動機を尋ねる形への修正として、逆転項目を修正し、教示文を「あなたが今できていないと

思う事で『できるようになりたい』と思う気持ちに最も近い数字に○をつけてください。またあなたが今できていると思う事には『もっとできるようにになりたい』と思う気持ちに最も近い数字に丸をつけてください」と修正して用い、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。

(c) 親和動機の測定

社会的スキル獲得動機尺度の妥当性の検討に使用するための親和動機を測定するために、杉浦(2000)による親和動機尺度18項目を用いた。この尺度は、分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表わし、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ「拒否不安」9項目と、拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える「親和傾向」9項目で構成されており、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。

結 果

1. 学校適応状態の分類

調査対象者を河村(1999a)に従って学校生活満足群、侵害行為認知群、非承認群、学校生活不満足群の4群に分類した。本研究におけるそれぞれの群の内訳は、学校生活満足群203名(男93名, 女110名), 侵害行為認知群140名(男70名, 女70名), 非承認群83名(男48名, 女35名), 学校生活不満足群170名(男101名, 女69名)であった。

2. 社会的スキル獲得動機尺度の信頼性・妥当性の検討

戸ヶ崎ら(1997)に従い、下位尺度ごとに得点を合計し、それぞれの獲得動機得点を産出した。次に信頼性を検討するために、それぞれの

下位尺度得点ごとに Cronbach の α 係数を産出した。その結果、「関係参加行動への獲得動機」が.90, 「関係向上行動への獲得動機」が.88, 「関係維持行動への獲得動機」が.85となり、十分な信頼性が確認された。

次に社会的スキル獲得動機尺度の妥当性を検討するために、これらの獲得動機得点と杉浦(2001)の親和動機の下位尺度得点との相関分析を行った。その結果、それぞれの獲得動機得点と親和傾向得点の間に中程度の正の相関($r = .35 \sim .55$)が、拒否不安との間に中程度の正の相関($r = .34 \sim .41$)が見られ、一定の構成概念妥当性が確認された(Table 1)。

3. 社会的スキル獲得動機の学校適応状態ごとの差の検討

社会的スキル獲得動機の学校適応状態ごとの差の検討するために、社会的スキル獲得動機尺度の3つの下位尺度のそれぞれについて、学校適応状態(学校生活満足群, 侵害行為認知群, 非承認群, 学校生活不満足群)を要因とする分散分析とLSD法による多重比較を行った。

その結果、「関係向上行動への獲得動機」と「関係参加行動への獲得動機」得点において、学校生活満足群、侵害行為認知群>非承認群>学校生活不満足群の順に、「関係維持行動への獲得動機」得点において、学校生活満足群>非承認群>学校生活不満足群および侵害行為認知群>学校生活不満足群の順に有意に得点が高いことが示された(Table 2)。

4. 社会的スキル獲得動機尺度各項目の学校適応状態ごとの差の検討

社会的スキル獲得動機尺度各項目の平均点を算出し、順位を学校適応状態ごとにまとめた。全体では、「自分に親切にしてくれる友だちには、親切にしてあげる」(第1位), 「友だちがよ

Table 1 社会的スキル獲得動機と親和動機との間の相関係数

	1.	2.	3.	4.
1. 関係維持行動への獲得動機				
2. 関係向上行動への獲得動機	.79 **			
3. 関係参加行動への獲得動機	.55 **	.67 **		
4. 親和傾向	.35 **	.51 **	.55 **	
5. 拒否不安	.34 **	.40 **	.41 **	.71 **

** $p < .01$

Table 2 社会的スキル獲得動機の学校適応状態ごとの差(平均値とSDおよびLSD法による多重比較の結果)

	1. 学校生活満足群 (N=203)	2. 侵害行為認知群 (N=140)	3. 非承認群 (N=83)	4. 学校生活不満足群 (N=170)	F値 (df)
関係維持行動への獲得動機 1, 2 > 3 > 4	26.87 (5.46)	26.01 (4.96)	25.19 (5.88)	23.38 (5.58)	13.33** (3, 593)
関係向上行動への獲得動機 1, 2 > 3 > 4	41.32 (6.02)	40.90 (5.73)	37.77 (7.35)	35.74 (7.36)	27.21** (3, 593)
関係参加行動への獲得動機 1 > 3 > 4 2 > 4	34.13 (5.82)	33.04 (5.10)	30.94 (6.82)	27.71 (7.09)	36.44** (3, 593)

**p<.01

くしてくれたときは、お礼を言う」(第2位), 「休み時間に友だちとおしゃべりをする」(第3位), 「友だちといっしょに遊ぶ」(第4位), 「友だちに話しかけることができる」(第5位)が上位5位であった。学校生活満足群・非承認群では順位に変動はあったものの上位5位に含まれる項目は全体と同じであった。侵害行為認知群では、全体で第8位であった「困っている友だちを助けてあげる」が第2位, 第7位であった「友だちに気軽に話しかける」が第4位に, 全体で第4位であった「友だちといっしょに遊ぶ」が第6位になっていた。学校生活不満足群では第1位と第2位が全体と同じ項目であったが, それ以外は全て異なり, 「まちがいをしたら, すなおにあやまる」(第3位), 「友だちの話をおもしろそうに聞く」(第4位), 「友だちが失敗したら, はげましてあげる」(第5位)が上位5位に含まれていた(Table 3)。

考 察

本研究の目的は, 中学生の社会的スキル獲得動機について調査を行い, 学校適応状態ごとにその際を検討することであった。

本研究の結果, 中学生の社会的スキル獲得動機は, 学校適応状態が悪化するほど低下する傾向が見られた。また個々のスキルに対する獲得動機の順位が, 学校適応状態によって, 特に生徒の不応感やいじめ・冷やかしの被害の有無についての「被侵害・不応感点」が高い群と低い群の間で上位に含まれる項目若干異なった

ことが示された。以下にそれぞれについての考察を行う。

(1) 社会的スキル獲得動機の学校適応状態ごとの差について

本研究の結果, 適切な仲間関係の形成, 維持, 向上に必要とされる社会的スキルに対する獲得動機は学校適応状態が悪化するにつれ, いずれも低下する傾向が示された。

河村(1999a)は最も不適応的な群である学校生活不満足群の生徒の特徴として, 自分から対人関係や学級集団との関わりを求めることが少ないことを挙げており, また4群の中で最も社会的スキル, 自尊心が低いことを示している。また鈴木・勝倉・杉江(1993)は, 中学生の友人関係領域での不適応感と成功の外的帰属, 失敗の内的帰属との関連を指摘し, 対人的な不適応感を感じている生徒のこのような原因帰属様式が対人関係に消極的な姿勢をもたらすことを示唆している。本研究では, 対人的な不適応感を最も強く感じている学校生活不満足群の生徒が対人関係への参加・維持・向上についての社会的スキルの獲得動機が他の3群に比べて最も低く, 適応状態が良好になるにつれて獲得動機が高くなることが示された。この結果は河村(1999a)や鈴木ら(1993)の知見と一致していると思われる。すなわち, 適応状態の悪い生徒ほど適応状態の改善に寄与する社会的スキルに対する獲得動機が低いという悪循環の存在が示唆された。つまり, 1つの学級を対象とした集団 SST を実施する際, 十分な社会的スキルが既に獲得されている生徒よりもむしろ社会的ス

Table 3 社会的スキル獲得動機各項目の学校適応状態ごとの順位 (25項目中, 上位5位)

分類	項目	全体 (N=596)		学校生活満足群 (N=203)		侵害行為認知群 (N=140)		非承認群 (N=83)		学校生活不満足群 (N=170)	
		順位	means	順位	means	順位	means	順位	means	順位	means
関係向上	自分に親切にしてくれる友だちには、親切にしてあげる	1	4.32	2	4.54	3	4.39	4	4.17	1	4.08
関係向上	友だちがよくしてくれたときは、お礼を言う	2	4.24	5	4.49	7	4.29	3	4.18	2	3.94
関係参加	休み時間に友だちとおしゃべりする	3	4.20	1	4.55	1	4.40	1	4.24	8	3.61
関係参加	友だちといっしょに遊ぶ	4	4.18	3	4.53	6	4.32	2	4.23	6	3.64
関係参加	友だちに話しかけることができる	5	4.16	4	4.50	2	4.39	5	4.13	10	3.59
関係参加	友だちに気軽に話しかける	7	4.09	6	4.43	4	4.38	6	4.12	15	3.42
関係向上	困っている友だちを助けてあげる	8	4.08	8	4.31	5	4.34	8	3.98	7	3.63
関係維持	まちがいをしたら、すなおにあやまる	6	4.11	7	4.32	8	4.29	7	4.04	3	3.76
関係向上	友だちの話をもしろそうに聞く	11	3.94	12	4.14	12	4.08	15	3.72	4	3.71
関係向上	友だちが失敗したら、はげましてあげる	9	4.03	9	4.30	10	4.16	11	3.84	5	3.70

キルの獲得が切に望まれる生徒の動機づけが最も低く、動機づけの面で付加的な介入が必要となる可能性が考えられる。今後はこの介入方法に関する研究を行っていく必要があるだろう。

(2) 社会的スキル獲得動機尺度各項目の学校適応状態ごとの差について

本研究の結果、個々のスキルに対する獲得動機において、生徒全体に対する調査結果と侵害行為認知群・学校生活不満足群といった対人的な不適應感を感じており、いじめ・冷やかしの被害を受けている可能性のある群の生徒の結果の間に差異が示された。

生徒全体に対する調査結果は、返報行動についてのスキルや友人との会話についてのスキルに対する獲得動機が強いことを示していた。特に返報行動についてのスキルに対する獲得動機はどの学校適応状態においても高く、これらは集団 SST において、適応状態に関わらず、生徒に受け入れられやすいスキルであると思われる。

また周囲に認められている一方でいじめや冷やかしの被害を受けている可能性のある侵害行為認知群の生徒においては、「気軽に」話しかけるスキルと、困っている友人への援助についてのスキルに対する獲得動機が他の群に比べ高いことが示された。この群の生徒は自己中心的な行動や態度、グループでの活動で生じる様々な問題への欲求不満耐性の低さによって被侵害感が高い可能性が指摘されており(河村, 1999a), また社会的スキルを実行できているという自己認知とは裏腹に他者への配慮が不十分である可能性が指摘されている(小野寺・河村・武蔵・荻間澤, 2003)。したがって、これらのスキル

に対する獲得動機の高さは、級友と関わることへの意欲的な態度が反映されている可能性と、意欲とは裏腹にそこでトラブルを生じさせてしまうことへの不全感が反映されている可能性が考えられる。

最も強い不適應感を感じている学校生活不満足群の生徒においては、謝罪についてのスキルや話の聴き方についてのスキル、友人の失敗場面での援助スキルに対する獲得動機が他の群の生徒に比べ高いことが示され、友人との会話についてのスキルに対する獲得動機が他の群の生徒、生徒全体の結果に比べ低いことが示された。話の聴き方についてのスキルは、数ある社会的スキルの中でも基本中の基本であり(相川, 2000), また学校適応を促進するスキルというよりもむしろ不適應状態に陥らないためのスキル(金山ら, 2004)と捉えられている。このスキルに対する獲得動機が高いことは、社会的スキルの基本であるこのスキルがこれらの生徒に定着していないことを反映しており、他の群に比べ社会的スキルを身につけていないこと(金山ら, 2004; 河村, 1999a; 小野寺ら, 2003)を反映していると思われる。また会話についてのスキルよりも謝罪についてのスキルへの獲得動機が高いという結果は、この群の生徒の特徴として対人的なトラブルを抱えている可能性が挙げられている点(河村, 1999a; 粕谷・河村, 2002)から、現在抱えているトラブルを解決したいという気持ちが反映されていると考えられる。したがって、集団 SST を実施する際、話を聴くことについてのスキルや謝罪についてのスキルを取り上げることが最も不適應的な生徒によって受け入れられやすく、また意義がある

と思われるが、この際に他の生徒の動機づけに対する付加的な配慮が必要になるとと思われる。

(3) 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点としては以下の3点が挙げられる。

まず第1に、社会的スキル獲得動機尺度と社会的スキル尺度との間の弁別的妥当性の検討が行われていない点が挙げられる。尺度の弁別的妥当性を確認し、また生徒が現在獲得しているスキルの程度と獲得動機との関連についての知見は得ることは、集団 SST のターゲットスキルの選択の際に有用であると思われ、今後検討する必要があると思われる。

第2に、本研究の調査対象者が中学1,2年生のみである点が挙げられる。落合・佐藤(1996)は友人との付き合い方が年齢を増すに従って変化することを指摘しており、今後は中学3年生や高校生、大学生の調査結果を加えた検討が必要であると思われる。

第3に、本研究で用いた戸ヶ崎ら(1997)で取り上げられていない社会的スキルに対する獲得動機についての検討が必要であると思われる。予防的・開発的な観点から集団 SST において様々な社会的スキル(佐藤, 1996)がターゲットとされることを考えると、より包括的な社会的スキル獲得動機の検討を行うことが必要であると思われる。

(4) まとめ

本研究の結果、中学生の社会的スキル獲得動機は学校適応状態ごとに程度が異なり、また獲得動機が高いスキルの種類にも差があることが明らかとなった。このことから、集団 SST で取り上げるスキルの種類によって、獲得動機が高い生徒と低い生徒が存在すること示され、指導を進める中で獲得動機の低い生徒への付加的な対応の必要性が示唆されている。さらに学校適応状態が良好な生徒に比べ、良好でない生徒の社会的スキル獲得動機が低いという結果からは、実際に学級において集団 SST を実施する際に、社会的スキルを学習されることが望まれる生徒の方がむしろ社会的スキル獲得動機が低いという困難な状況が推測される。今後はこの

社会的スキル獲得動機を高める要因について検討を行い、この社会的スキル獲得動機を高めるようなアプローチについて研究を行う必要があるだろう。

引用文献

- 相川 充 2000 人づきあいの技術 —社会的スキルの心理学— サイエンス社。
- 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51, 339-350.
- 藤永 保・仲真紀子(監修) 2004 心理学辞典 丸善株式会社 302.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2002 学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点 —学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討— カウンセリング研究, 35, 116-123.
- 河村茂雄 1999a 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1) —学校生活満足度尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, 32, 274-282.
- 河村茂雄 1999b 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(2) —スクール・モラル尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, 32, 283-291.
- 金山元春・中台佐喜子・前田健一 2004 中学生の積極的な聴き方スキルと学校適応 広島大学心理学研究, 4, 97-102.
- 金山元春・佐藤容子・佐藤正二 2000 児童の社会的スキルと孤独感 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 343.
- 金山元春・佐藤正二・前田健一 2004 学級単位の集団社会的スキル訓練 —現状と課題— カウンセリング研究, 37, 270-279.
- 小暮陽介・宝田幸嗣 2005 中学生を対象とした担任の指導による SST の効果Ⅱ —SST が社会的スキル, 学校生活適応感, 対人的自己効力感に及ぼす影響— 日本カウンセリング学会第38回大会発表論文集, 261-262.
- 後藤吉道・佐藤正二・佐藤容子 2000 児童に

- 対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, 26, 15-24.
- 松村 明(編) 1998 大辞泉 増補・新装版 小学館.
- 文部科学省 2003 生徒指導上の諸問題の現状について
- 文部科学省 2004 平成16年度学校基本調査
- 中台佐喜子・金山元春・斉藤由里・新見直子 2003 小, 中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域), 52, 267-271.
- 小野寺正巳・河村茂雄・武蔵由佳・苅間澤勇人 2003 中学生の援助レベルの理解と対応 — ソーシャル・スキルの視点から— カウンセリング研究, 36, 31-37.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 佐藤正二 1996 第9章 子どもの社会的スキル トレーニング; 相川 充・津村俊充(編) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係 —自己表現を援助する 誠信書房 173-200.
- 佐藤正二 2004 第3章 集団介入の利点, 欠点, 工夫点; 坂野雄二(監修) 学校, 職場, 地域におけるストレスマネジメント実践マニュアル 北大路書房 29-40.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1988 拒否される子どもの社会的スキル 行動療法研究, 13, 26-33.
- 杉浦 健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 —その発達的变化— 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 鈴木秀行・勝倉孝治・杉江 征 1993 中学生の原因帰属様式と不適応感の関連について 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 137.
- 戸ヶ崎泰子・秋山香澄・嶋田洋徳・坂野雄二 1995 中学生の社会的スキルが友人関係と学校不適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 557.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスの関係 健康心理学研究, 10, 23-32.
- 渡辺弥生・山本弘一 2003 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果 —中学校および適応指導教室— カウンセリング研究, 36, 195-205.

【付記】

調査に協力していただいたみなさまや、調査機会を与えていただいた中学校の先生方に心からの感謝の気持ちを申し上げます。また、使用する用語の検討にご協力をいただきました愛知学泉大学家政学部の久木山健一先生、貴重な資料を送付していただいた天理大学人間学部の金山元春先生に心より感謝申し上げます。